

研究開発成果 実装支援プログラム

平成22年度 報告書

実装活動の名称

「英虞湾の環境再生へ向けた住民参加型の干潟再生体制の構築」

採択年度 平成21年度

実装機関名 三重県水産研究所

実装責任者 国分 秀樹

1. 概要

- ・モデル実装地において、事前調査を含め、年に4回の頻度で生物および底質の変化について調査を行った。海水導入前の事前調査の結果、底質は有機物含有量が高く非常に嫌気的な状態であった。そのため、生息する生物は非常に少なく、多様性の低いことがわかった。さらに海水導入後、事前調査では、ユスリカなどの富栄養化した場所に生育する生物が6種類しかみつからなかったのに対し、干潟再生6ヶ月後には、小型魚類や、ウミニナ、ケフサイソガニのような移動性の生物を中心に20種類が再生干潟にみられるようになった。またアサリの稚貝も出現した。徐々にではあるが確実に生物が増加していることが明らかになった。
- ・次年度以降のコアマモ場造成のためのコアマモ種苗の増殖を水産研究所陸上水槽で平成22年10月より行った。翌年の2月に陸上水槽において、コアマモの発芽を確認し、順調な生育を確認した。
- ・ハード事業担当行政部局である三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を実施し、実装事業の進捗状況の情報共有と干潟再生にかかる問題点の整理、事業化へ向けた検討を行った。次年度意向も定期的実施する。
- ・地元協力機関（志摩自然学校、横山ビジターセンター、環境情報センター）と5、6、7、9、11月に干潟再生海域において生物観察会や指導者育成講座、アサリの放流、コアマモの移植などの干潟再生活動を実施した。また次年度以降の連携体制について、計画調整を実施した。
- ・COP10にあわせて、ブース展示やエキスカージョンの招待、ワークショップでの報告など広く事業のアピールを行った。
- ・英虞湾再生協議会において事業概要の説明を行い、今後の活動の協力について承認された。
- ・マスコミやシンポジウム、学会などを通じて、広く事業活動の成果をアピールした。
- ・市役所との連携も進めており、市の総合計画に中で本事業で実施視している干潟再生について明記していただける予定である。

2. 実装活動の具体的内容

【アサリの放流】

- 再生のシンボルとなるアサリの定着と増殖を目指し、約10mm程度のアサリ稚貝を購入し、モデル実装地に放流する。放流の際には、英虞湾再生協議会を中心に、地元住民および関係団体と連携し、イベントとして放流作業を行う。また、実装地内には再生評価用の放流も行う。
- 再生のシンボルとなるアサリの放流を、2010年11月にイベントとあわせて実施した。干潟とアマモ場の再生体験を、志摩市と志摩自然学校と三重大学の共催で実施した。志摩市を中心とした一般県民の方々や市民の方々が総勢約20名参加していただいた(写真)。約100キロのアサリを放流した。また、ダイバーに海底の様子を動画に撮っていただき、参加者全員で確認した。放流後アサリの潜砂を確認した。作業の概要を図1に示した。



放流用のアサリ



アサリの放流の様子



アサリの放流後の様子

図1 作業の概要

【コアマモ育成】

- 次年度以降のコアマモ場造成のためのコアマモ種苗の増殖を水産研究所陸上水槽で行う。
- 鳥羽市浦村海域よりコアマモの生殖株を網袋（40cm四方）に10袋採取し、かけ流しの陸上水槽で約1ヶ月日光に当てながら追熟した後、脱落した種子を選別採取した。種子は約1ヶ月冷蔵保存した後、播種を行った。播種を行う陸上水槽には、トレー（60cm×40cm×15cm）を50個を設置し、天然海砂と英虞湾海底の泥を混合したものを入れ、ヤシ繊維マットを敷設した後、コアマモ種子を各トレーに30粒ずつ播種した。播種は平成22年1月に実施した。陸上水槽はサイフォンを用いて、1日に2回干満を繰り返すように調整し、水深をコアマモの適正生育水深に調整し、種苗の増殖を行った。結果、平成22年2月には種子が発芽し、順調な生育を確認した。作業の概要を図2に示した。



図2-1 マットを施設した増殖用トレーへの播種 図2-2播種完了後のコアマモ増殖用水槽

【コアマモ場の造成】

- 平成21年度に増殖育成したコアマモ種苗を用い、モデル実装海域において地元住民とともに移植を行う。
- 陸上水槽において十分に生育させたコアマモ種苗を地元住民とのイベントに合わせて、移植を行った。移植は2010年5, 7, 9, 11月に実施し、計400枚（16m²）の移植を実施した。11月には、イベントに合わせて、志摩自然学校、三重大学、志摩市とともに潜水作業で実施した。また、12月に調査用のコアマモも同水域に移植し、今後継続してモニタリングを実施予定である。作業の概要を図3に示した。



図3-1 移植用コアマモ種苗



図3-2 地域住民による移植



図3-3 ダイバーによる移植の様子



図3-4 移植後のコアマモの様子

【生物調査】

- 海水導入後の干潟再生効果を評価するため、5、8、11、2月に海水導入後の生物量及び底質環境の変化の調査を行う。また、5、8、11月には、地元住民とともに調査を実施する。
- 平成22年5、8、11、2月にモデル実装海域において、海水導入後の生物量及び底質環境の変化の調査を実施した。調査地点の概要を図4に、調査の概要を図5に、再生干潟の底質及び生物の変化を図6に示した。

海水導入前では、ユスリカやカワゴカイ (*Hediste sp.*) などの汽水性で富栄養化した場所に生育する生物が6種類しか生育していなかった。海水導入後、再生干潟は海域と同等の塩分 (29-32‰) に上昇し、徐々に汽水性から海水性の生物に変化した。海水導入6ヶ月後には、ボラやハゼやスズキの稚魚等の小型の魚類や、ホソウミニナ (*Batillaria cumingii*) やヘナタリ (*Cerithideopsisilla cingulata*)、ケフサイソガニ (*Hemigrapsus penicillatus*) のような移動性の生物を中心に20種類見られるようになった。またアサリ (*Ruditapes philippinarum*) の稚貝も出現した。底質についても、海水導入区でAVS、CODともに明確な減少がみられた。これは、海水導入を行うことにより、再生干潟と海域との海水交換が促進され、徐々に底質が好酸化していることを示す。それにより、潮受け堤防後背地に堆積している高濃度の有機物の分解が徐々に進行し、小型動物の生息に適した底質環境へ変化していることが推測された。以上より、今後継続して調査する必要があるが、海水導入により富栄養化した潮受け

堤防後背地の生物生産性を向上できる可能性が示唆された。

また、5, 7, 9, 11月には、イベントに合わせて、地元住民とともに調査を実施した。

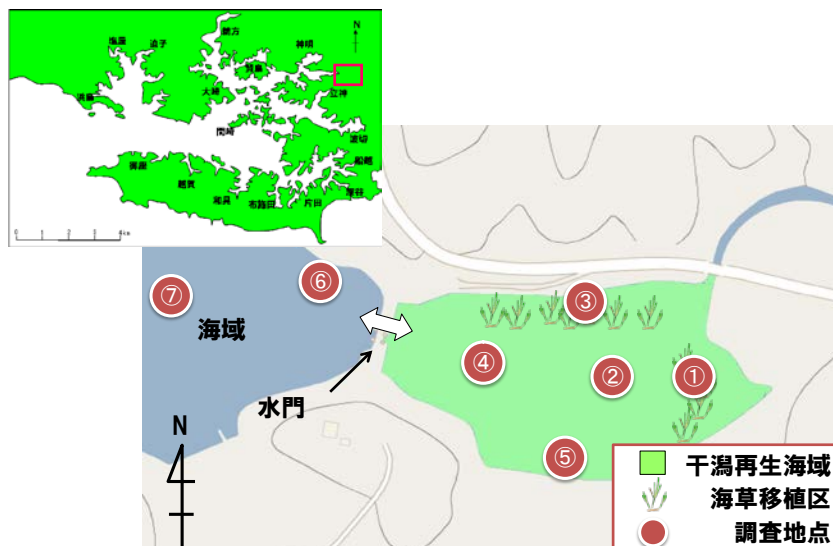


図4 再生干潟と調査地点の概要



図5-1 底質調査の概要



図5-2 生物調査の概要



図5-3 採取された生物



図5-4 住民との生物調査

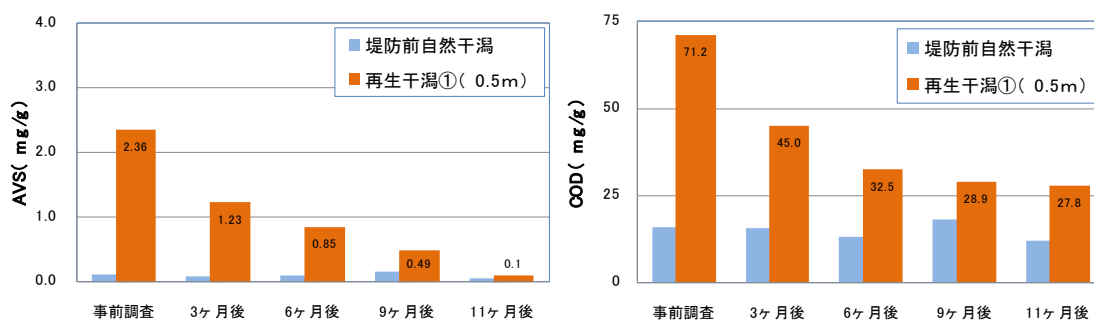


図6-1 海水導入（干潟再生）後の底質環境（AVS, COD）の変化

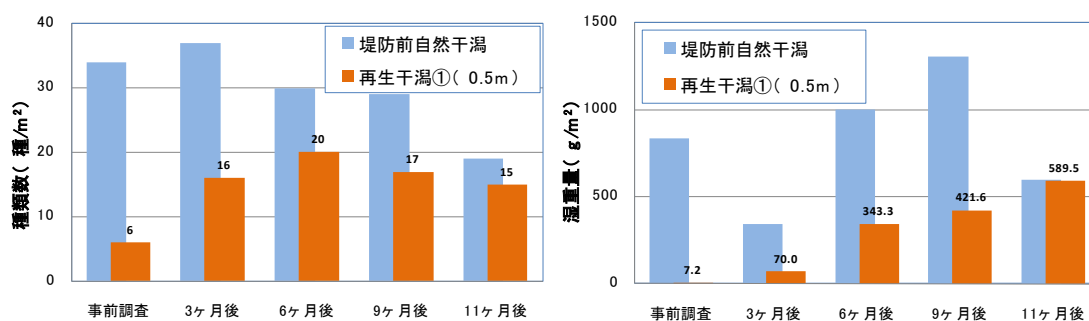


図6-2 海水導入（干潟再生）後の小型動物の種類数，湿重量の変化

【環境学習会と再生協議会連携イベント】

●再生干潟における生物調査や、アサリ放流，コアモモ場造成に併せて，地元住民を対象に環境学習会を実施する。

モデル実装地において，干潟再生のキックオフイベントを実施する。イベントの際には，地元住民によるアサリ放流，コアモモ移植および環境学習会を実施する。

○2010年5, 7, 9, 11月に地元住民を対象に「伊勢志摩国立公園横山ビジターセンター」と「三重県環境学習情報センター」，「志摩自然学校」，「志摩市」，「三重大学」と連携して干潟再生の体験イベントを実施した。これらのイベントは，事業終了後の自律的な再生活動の継続基盤の構築と，地元住民への干潟再生効果の普及啓発を目的として開催した。今後再生活動の主体を，上記の機関に移行していきたいと考えている。参加者の中には複数回参加していただいている方も見られた。イベントの概要は下記のとおり。

- ◆5/29 干潟観察会 横山ビジターセンター
(対象:志摩市民25名)
- ◆7/27 干潟観察会 環境学習情報センター
(対象 立神小学校および水沢小学校 50名)
- ◆9/11 干潟観察会 横山ビジターセンター，志摩市
(対象 志摩市民 20名)
- ◆11/13 干潟再生体験 志摩自然学校，三重大学，志摩市
(対象:一般市民20名)



図7-1 碎波帯ネットによる生物の採集



図7-2 生物の同定分類



図7-3 参加者の集合写真(9/11)



図7-4 採集生物の説明

【指導者育成講座】

●環境に興味のある地元住民を対照に、今後干潟再生活動(生物調査やコアマモ場再生)に関する指導者を育成するための取り組みを行う。

○2010年6月に「三重県環境学習情報センター」と協力して、干潟再生に関心のある地元住民の方々を対象に、「干潟生物研修スキルアップ講座」を実施した。このイベントでは、日本国際湿地保全連合が提唱する調査手法についての研修と英虞湾における干潟再生の意義についての講習を行い、より熱心な地元住民の方々に今後の再生活動を担っていただくための、研修を実施した。

◆6/13 干潟生物研修スキルアップ講座 環境学習情報センター
(対象:志摩市民10名)



図8-1 研修の様子



図8-2 研修の様子

【地元への報告会】

●実装支援中に得られた成果については、定期的で開催される英虞湾自然再生協議会および年次報告会を開いて報告し、さらには事業担当行政部局とも情報共有する。

○2010年6月に英虞湾自然再生協議会を、2011年2月にシンポジウム「海とともに生きる志摩市」を実施し、地元住民への事業成果の報告を行った。自然再生協議会については英虞湾周辺の漁業者や自治会、観光業界、行政など39の多様な団体で構成されており、出席者の皆様に実装活動の現状や目的などを説明し、理解をいただいた。また2月に開催したシンポジウムでは、地元志摩市、環境省との共催で実施し、地元住民をはじめ志摩市職員に向けて事業成果の説明を実施した。今後志摩市においても、本事業の干潟再生について総合計画の重点課題に数値目標を掲げて取り組んでいただくことになった。



図9-1 英虞湾自然再生協議会



図9-2 英虞湾自然再生協議会



図9-3 シンポジウムの様子



図9-4 パネルディスカッション

【事業化検討研究会】

●事業担当行政部局である三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を実施し、実装事業の進捗状況の情報共有と問題点の整理、事業化へ向けた検討を定期的に進める。

○2010年5月と2011年2月に、三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を開催し、実装事業の進捗状況の情報共有と問題点の整理、事業化へ向けた検討を実施した。堤防の管理を行っている農業基盤部局にも現状を説明し、少しずつではあるが、沿岸の休耕地活用についての理解を得られつつある。本年度は、農業基盤室から、実装支援事業の成果を、農業部局の立場からと水産部局の立場からの両方の観点から、「農業農村工学会」へ報告してほしいとの要望もあり、学会報告も行った。さらに農林水産省においても、新聞報道等で英虞湾での活動が認識され、国の機関にも注目が広がっている。また水産基盤の部局では、本年度英虞湾内全域に存在する沿岸休耕地の詳細な調査を実施し、土地利用形態から利用状況、所有者等のデータベース化を実施し、今後の英虞湾再生事業化へ向けた、情報の整理を実施してもらった。

次年度以降は、定期的に研究会を実施し、石淵以外のさらなる干潟再生へ向けて候補地を選定し、その候補地を再生するにあたっての課題整理を研究会の中で実施していくことになった。

【PR活動（他海域への展開）】

●イベントの際にはマスコミを通じて広報する。またCOP10にあわせてイベントを企画し、パートナーシップ事業として広く干潟再生の取り組みの広報活動を行う。また、事業のHP等の作成も行う。

○本年度は、COP10をはじめ多くの注目されるイベントが開催されたため、それに合わせて広く国内外へ向けてPR活動を実施した。その結果下記の3以降に示すように、新聞やテレビ、シンポジウムや講演会など、多数の場所から注目され、広く事業活動をアピールできた。特に10月に名古屋で開催されたCOP10では、志摩市と共同でブース展示を実施し、またサイドイベントである「里うみワークショップ」では実装活動について報告を行い、生物多様性（CBD）事務局の発行する冊子にも英虞湾の活動を掲載していただいた。さらにCOP10の公式エクスカースションとして参加者30名が、英虞湾へ視察に訪れた。以上のように国内外に広くPRができた。COP10の概要は下記のとおり。

また、事業紹介用のパンフレット(日英版)やHPを新たに開設した。



図10-1 COP10の展示ブース

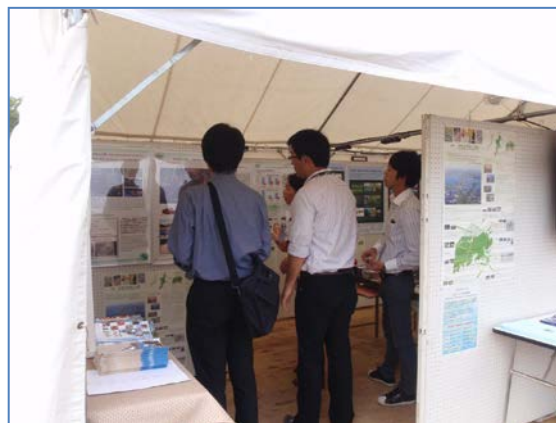


図10-2 ブース展示の概要



図10-3 COP10参加者のエクスカーシオン



図10-4 サイドイベント「里うみワークショップ」

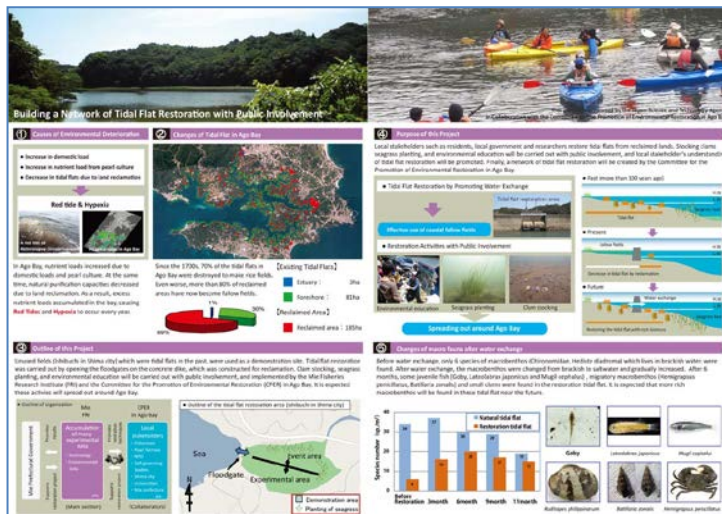


図10-5 事業紹介用のパンフレット(日英版)



図10-6 水産研究所の事業HP

【再生効果の予測と再生技術のモデル化】

●湾内および他海域への展開を目指し、再生効果の予測や防災面からみた水門の適正開放率についてモデル化を行う。

○本事業の中で取り組んでいる、海水導入による石淵の沿岸休耕地の再生効果の評価の中で、最終目標である、他の沿岸休耕地の再生に同様な手法を用いて着手する場合、個々の休耕地に対して再生効果および海水導入時の最高潮位等に関する予測が必要となることが考えられる。そこで、本年度より大成建設(株)技術センターと共同研究を実施することにより、再生効果の予測と再生技術のモデル化を推進することになった。今後調査データを解析し、連携することによって、進めていく。

3. 理解普及のための活動とその成果

(1) 展示会への出展等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
2010.10.12-28	COP10ブース展示	名古屋国債会議場	志摩市と共同で英虞湾における里うみ再生の取り組みと、干潟再生の取り組みについて展示紹介した。	一般市民 国内外の行政関係者、NPO等	大きい来場者数延べ2000人

(2) 研修会，講習会，観察会，懇談会，シンポジウム等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
2010.04.25	環境イベント「つなぐるフェス」	賢島大学	英虞湾周辺住民が実施する環境イベントにおいて、英虞湾の干潟再生と環境に関する講演と体験学習を実施した。	志摩市民	40名
2010.05.29	石淵干潟観察会	実装海域	伊勢志摩国立公園横山ビジターセンターと共催で、実装海域において、干潟再生体験と生物観察会を実施した。	志摩市民	25名
2010.06.03	英虞湾自然再生協議会	阿児アリーナ	志摩市周辺の39の多様な主体で構成される「英虞湾自然再生協議会」において干潟再生事業の内容説明と進捗状況の報告を実施した。	志摩市民、漁業者、行政など	30名
2010.06.04	沿岸域学会の「渚空間創出の具現化に関する研究会」	キャンパスポート大阪	沿岸域の環境再生に必要な技術的・法律的課題を抽出し、改善案を提言することを目的としている研究会、沿岸域学会の「渚空間創出の具現化に関する研究会」に参加し、実装支援	大学関係者および地方自治体研究者	10名

実装支援プログラム22年度報告書 様式

			事業で行っている、英虞湾の干潟再生事例を報告し、議論を行った。		
2010.06 .13	干潟生物研修スキルアップ講座	水産研究所	志摩市周辺の干潟再生に興味のある住民を対象に、干潟生物の同定研修と事業の説明を実施した。	志摩市民	10名
2010.06 .25	地方環境研究機関と国立環境研究所との研究連絡会議	山口県保健環境研究所	国立環境研究所と環境研究機関との研究会「浅海域の干潟・藻場における生態系機能に関する研究会」において、実装支援事業で取り組んでいる英虞湾の干潟再生の概要を説明した。	国立環境研究所及び地方自治体職員	20名
2010.06 .28	統合的沿岸管理研修会	海洋政策財団	海洋政策財団が推進している統合的沿岸管理（ICM）の研修会に志摩市をめぐり、本事業の担当者が招待され、志摩市のICMの取り組みとその中に位置づけられる、英虞湾の沿岸休耕地の干潟再生事業の事例紹介を行った。	全国自治体及び省庁職員	50名
2010.07 .27	石淵干潟観察会	実装海域	三重県環境学習情報センターと共催で、地元の立神小学校と水沢小学校の学生を対象に、干潟再生事業の体験と生物観察会を実施した。	立神および水沢小学校	50名
2010.07 .30	木曾川河川事務所視察	実装海域	木曾川河川事務所より、英虞湾の干潟再生事業の事例を今後の事業の参考にしたいとの依頼があり、現場で事業概要の説明を実施した。	木曾川河川事務所職員	10名
2010.08 .09	四日市大学サマースクール	高松干潟および公民館	四日市大学より、サマースクールにおける干潟生物研修と事業説明の講師依頼があり、干潟生物の同定研修と事業の説明を実施した。	四日市大学生及び県内の高校生	20名

実装支援プログラム22年度報告書 様式

2010.08 .25	志摩市職員研修 会	実装海域	志摩市の行政職員を対象 に、職員研修の一環として 英虞湾の干潟再生の概要 を紹介した。志摩市は英虞 湾の里うみ再生を重点課 題として位置づけている。	志摩市 職員	20名
2010.09 .11	石淵干潟観察会	実装海域	伊勢志摩国立公園横山ビ ジターセンターと志摩市 の共催で、実装海域おい て、干潟再生体験と生物観 察会を実施した。	志摩市 民	20名
2010.10 .20	JICA干潟再生事 例に関する研修	実装海域	JICAより日本における自 然再生事業の先進事例視 察の依頼があり、英虞湾に おける干潟再生活動の概 要について説明した。	中東の 省庁関 係者	15名
2010.10 .12	COP10里海ワー クショップ	名古屋国際会議 場	CBD事務局が主催のサイ ドイベントとして里海ワ ークショップが開催され そのワークショップで、英 虞湾における干潟再生活 動の概要について紹介し た。	海外 COP10 参加者、 一般市 民、国内 外の行 政担当 者	150名
2010.10 .24	愛知県保険医師 会視察	実装海域	愛知県保険医師会は社会 貢献活動として、環境活動 支援をしているというこ とであり、先進活動の視察 として英虞湾の干潟再生 を見学にきた。	愛知県 保険医 師会会 員	15名
2010.10 .24	COP10エクスカ ーション	志摩市横山ビジ ターセンター	COP10の公式エクスカー ションとして伊勢志摩エ リアの里海再生活動の視 察があった。	海外 COP10 参加者	40名
2010.10 .27	松阪高校出前授 業	松阪高校	松阪高校から依頼があ り、将来に環境再生活動 等の分野に進みたい学生 を対象に現在実施してい る、英虞湾の干潟再生活 動の説明を実施した。	高校生1 年生	30名
2010.11 .13	石淵干潟再生体 験	実装海域	志摩自然学校と志摩市、三 重大学が共催で、実装海域	志摩市民	20名

実装支援プログラム22年度報告書 様式

			において、干潟再生体験とアサリの放流およびコアモの移植活動を実施した。		
2010.11.19	鳥羽志摩環境教育委員会職員研修	水産研究所	鳥羽志摩環境教育委員会職員研修として、伊勢志摩地域の環境と干潟再生の重要性について説明を行った。	鳥羽志摩環境教育委員会委員	15名
2010.12.20	国際里海ワークショップ	金沢市文化ホール	COP10のクロージングイベントと生物多様性年の最終イベントとして、金沢で開催された「国際里海ワークショップ」において、招待講演として英虞湾の干潟再生事業の概要を報告した。	一般市民および全国各地及び省庁職員	200名
2011.02.01	水産庁干潟再生現場視察	実装海域	水産庁の基盤整備の担当者が、英虞湾の干潟再生現場に視察にこられ、現場において説明を行った。	水産庁基盤整備課	2名
2011.02.03	国際海洋科学委員会	社団法人海洋科学技術協会	国際海洋科学委員会より、講演の依頼があり、英虞湾の干潟再生について説明を実施した。	水産庁および大学関係者	10名
2011.02.11	タイ国環境行政関係者視察研修	実装海域	タイのチョンブリ県をはじめ環境行政関係者から、国内のICMを実践している自治体の先進事例である志摩市の取り組みについて視察の依頼があり、その中で干潟再生事業の説明を行った。	タイチョンブリ県知事、タイ環境行政関係者	15名
2011.02.16	地方環境研究機関と国立環境研究所との研究連絡会議	国立環境研究所	国立環境研究所と環境研究機関との研究会「浅海域の干潟・藻場における生態系機能に関する研究会」において、実装支援事業で取り組んでいる英虞湾の干潟再生の概要を説明した。	国立環境研究所及び地方自治体職員	20名
2011.02.20	シンポジウム「海とともに生きる志摩市」	阿児アリーナ	地元志摩市、環境省との共催で実施し、地元住民をはじめ志摩市職員に向けて事	志摩市民志摩市職員	150名

			業成果の説明とパネルディスカッションを実施した。		
2011.03 07	伊勢湾再生推進会議	名古屋国際会議場	省庁職員および伊勢湾周辺自治体の各分野の行政職員から構成される、「伊勢湾再生水深会議」において三重県の重要な先進事例として英虞湾の干潟再生について報告を行った。	省庁職員 および伊勢湾周辺自治体行政職員	60名
2011.03 .08	内閣官房海洋政策局視察	実装海域	海洋基本法とICMの担当省庁である内閣官房海洋政策局より視察の依頼があり、干潟再生事業に就いて説明を実施した。	内閣官房 海洋政策局職員	5名

(3) 新聞報道, TV放映, ラジオ報道, 雑誌掲載等

①新聞報道

- ◆ 04/02 毎日新聞「干潟で英虞湾再生へ」
- ◆ 04/10 中日新聞「干拓地に海水よみがえる干潟」
- ◆ 04/10 読売新聞「英虞湾浄化へ干潟再生」
- ◆ 04/10 毎日新聞「英虞湾堤防水門を開放」
- ◆ 04/15 毎日新聞「滞留水排出し干潟」
- ◆ 04/26 中日新聞「自然との共生考えよう」
- ◆ 05/08 読売新聞「堤防の水門開放 様々な生き物よみがえる」
- ◆ 05/23 毎日新聞「恵み復活へ干潟を浄化」
- ◆ 05/30 中日新聞「英虞湾の干潟よみがえれ」
- ◆ 05/30 毎日新聞「石淵池に干潟を取り戻そう」
- ◆ 05/30 読売新聞「干潟の大切さを学ぶ」
- ◆ 06/17 中日新聞「再生開始後初の調査」
- ◆ 07/28 読売新聞「四日市と志摩の小学生干潟で交流」
- ◆ 09/11 中日新聞「英虞湾の干潟再生で家族連れら自然体験」
- ◆ 09/11 読売新聞「干潟2カ所で比較観察」
- ◆ 07/28 中日新聞「英虞湾で生物観察会」
- ◆ 10/17 朝日新聞「英虞湾干潟 海水が再生」
- ◆ 10/27 伊勢新聞「COP10 エクスカーション」
- ◆ 11/13 中日新聞「英虞湾の干潟 海水の浄化を」
- ◆ 11/13 毎日新聞「アサリ放流しコアマモ移植」
- ◆ 12/06 朝日新聞「海再生へ干拓地を干潟に」
- ◆ 02/13 中日新聞「志摩市都情報交換 タイ国チョンブリ」
- ◆ 02/22 中日新聞「里海創生あり方探る」

②TV放映

- ◆ 04/09 NHK 「ニュース 石淵の干潟再生」
- ◆ 04/21 NHK 「ニュース 石淵の干潟再生」
- ◆ 10/22 NEWS ZERO 「COP10企画 干潟が、海の生き物を守る」
- ◆ 10/27 ITV 「COP10エクスカカーションの内容」 (国分, 山田)

③ラジオ報道

- ◆ 04/20 CBCラジオ 「干潟再生」
- ◆ 11/12 FM三重 「干潟再生イベント開催」

④雑誌掲載

- ◆ 11/10 Japan for sustainability news letter 「Activity of tidal flat restoration in Ago Bay」
- ◆ 11/10 海の手SOS 2月号 「英虞湾奥部における沿岸休耕地を活用した干潟再生活動について」

(4)論文発表 (国内誌____件, 国際誌1件)

- ◆ Osamu Matsuda and Hideki Kokubu, TOWARDS SATOUMI IN AGO BAY, Biological and Cultural Diversity in Coastal Communities, 2008. p.92-111.

(5)WEBサイトによる情報公開

- ◆ 三重県水産研究所
(http://www.mpstpc.pref.mie.lg.jp/SUI/jissousien/jisso_kai.htm)
- ◆ 海洋政策財団映像ブログ (<http://blog.canpan.info/oprficm/>)
- ◆ ジャパン・フォー・サステナビリティ (JFS)
世界191ヶ国約1万人の読者にメール配信するニュースレター
(<http://www.japanfs.org/en/mailmagazine/newsletter/pages/030434.html>)

(6)口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

- ◆ 国分秀樹, 山田浩且, 「英虞湾沿岸休耕地における干潟再生の取り組み」農業農村工学会, 三重県総合文化会館, 2010年11月18日.
- ◆ 国分秀樹, 山田浩且, 「英虞湾奥部における沿岸休耕地の再生活動について」水産海洋学会, 桑名赤須賀会館, 2010年12月04日.

①招待講演 7件 (国内会議 5件, 国際会議 2件)

- ◆ 06/30 統合的沿岸管理研修会
- ◆ 08/09 四日市大学サマースクール
- ◆ 10/12 COP10里海ワークショップ
- ◆ 12/20 国際里海ワークショップ
- ◆ 02/13 国際海洋科学委員会
- ◆ 02/20 シンポジウム「海とともに生きる志摩市」
- ◆ 03/07 伊勢湾再生推進会議

(7)特許出願

特になし

(8) その他特記事項

◆事業全体の進捗状況と今後の予定について

事業計画は概ね計画通りに遂行できた。本年度は特にCOP10が近隣の名古屋で開催されたこともあり、生物多様性について国内外の注目度は高く、その恩恵を受けて、メディア等に多く取り上げられ、非常に事業のPRになった。さらにメディア等で取り上げられたことが発端として、志摩市以外の自治体や国の省庁等からの視察や講演依頼が非常に多かった。これは、沿岸休耕地というこれまで手をつけられていなかった場所について、着目して取り組んだ本事業の新規性と、統合的沿岸管理にもつながる、本来の縦割り行政の枠を超えた横断的な取り組みが注目された結果であると考えられる。この取り組みは、水産庁や環境省、国交省をはじめ、伊勢湾再生推進会議など、国内の同様な問題を有する海域への有効な先進事例になる可能性を有している。

また、地元である志摩市では、市長をはじめ本事業の干潟再生に理解をいただいております。来年度以降の志摩市の総合計画の重点課題に「5年後に5カ所の干潟を再生する」と明記していただくことになった（市議会承認済み）。少しずつであるが、地元への定着が進みつつある。それにあわせて、次年度以降は、堤防を管理する農業部局や水産部局とともに実施している「干潟再生研究会」において、石淵以外のさらなる干潟再生へ向けて候補地を選定し、その候補地を再生するにあたっての課題整理を研究会の中で実施していく予定である。

さらに、サポーターとしての地元の理解を増進するため、引き続き干潟再生体験等のイベントを継続する。事業終了後の体制の構築に向けて、地元の横山ビジターセンターや志摩自然学校に再生活動の基盤を担っていただけるように徐々にイベントの主体も移行していく予定である。